

カーニヴァル化と文学

エレナ・パレンテ・クーニャ

池上岑夫訳

大きく広がるわれわれの現実の両端を画するものとして対のかたちでさまざまな対立が存在しています。その一つとして笑いと真面目の対があります。これは人間存在にとって必要欠くべからざるもの、この世界に人間が存在するときの基本的態度の一つであります。真面目な調子かさもなければ笑いの言語によって、われわれは宇宙の基本的な原理を表現し、事物の真理、およびわれわれが生きているその生に認められて真理を認識できるのであります。

文学とは現実表現の一形式、存在の意識化の一つと理解したとき、われわれは笑いと真面目のいずれか一つ(あるいはその両者)が文学作品に必ず存在することの深い意味を悟ることができるのであります。

ここでわたくしが言っております真面目と笑いというカテゴリーは極端なケース、現実には絶対的なかたちで実現するのはきわめて困難な状況を考えているのであります。人間の在り方、または文学作品においてはこれら二者のいずれかが他のものより優勢なかたちで現われるのが普通であります。

笑いと真面目の概念を理解していただくために、極端な言い方を続けさせていただきますが、真面目な側面は権力を保有する階級のあの公的な調子とつながり、滑稽な側面は民衆的要素に近くなります。と言いますのは、笑いは民衆のなかから自然発生的に生じるものであって、民衆というものは冗談を言うことによって権力者にたいする抗議を表明し、権力者を滑稽な存在たらしめるからであります。

古典的詩学は17世紀にフランスで確立し、二世紀に亘ってヨーロッパで支配的な力を発揮したのでありますが、その古典的詩学は滑稽なものに価値を認めず、文学のさまざまなジャンルに上下の区別をつけるにあたっては、貴族階級や名門の生まれの人を主要な登場人的とする悲劇と叙事詩に高い地位を与え、諷刺と喜劇を劣ったものとしているのであります。このような偏った考え方は、

ある意味では、現在でも認められるものであります。

ソヴィエトのバフーチンの研究はフランス語の翻訳によって最近ブラジルでも広く知られるようになりましたが、彼はそのなかで、古典的詩学のエリート主義的な基準を覆し、それまで軽視されていたもの、すなわちバフーチン自身の用語によれば、民衆の卒直な笑いに根差す「カーニヴァル化した文学」(literatura carnalizada)に関心を寄せております。

カーニヴァル化した文学には滑稽なものにつながるいくつかのジャンルが含まれますが、この種の文学は、直接的あるいは間接的に、カーニヴァルの影響を受けております。ここでわたくしが言っておりますカーニヴァルとは単に西欧の民衆によるあの祭りのことのみではありません。ちなみにこのカーニヴァルは地域によってそのプレスティジに違いがありますが、ブラジルにあっては極めて有名なものとなり、現在では世界各地から観光客が見物にやって参ります。

バフーチンの言うカーニヴァルなる語は民衆によるこの祭りの持つ豊かで変化に富んだ生命をも含む広い意味を持つものであります。彼はこの祭りを人間の文明の原初的で根絶不能なカテゴリーと見ております。

文学のカーニヴァル化とは、程度はさまざまであります。カーニヴァルの精神を文学のなかに持ちこむことであります。しかし、カーニヴァル化とは、それ自体で完結・完成した一つの内容につけ加えられる外的な形式と要約できるようなものではありません。それは柔軟な文学観の一形式、つまり文学現象を新しい視点から見ることを可能にしてくれる原理であります。

カーニヴァルはシンクレディズム的性格を持つ複雑な行事であり、そこには民衆や時代による相違が認められるのであります。現在のカーニヴァルの起源は中世のカーニヴァルにありますが、中世のカーニヴァル自身も古代ローマのサトゥルヌス神——黄金の時代、すなわち伝説的な、平安と豊穡の時代を生んだあのサトゥルヌス神を祝うサトゥルヌス祭につながっております。この祭りの特徴は掟と規律をゆるがし、象徴的なかたちでカオスの状態を現出することにあります。カーニヴァルもサトゥルヌス祭もともに底抜けの大騒ぎの性格を持つものであり、その起源は遠く宗教的なものであります。いずれの祭りにあっても、そこに実現されたカオスの状態のなかで、間接的に、再生の約束を得

で激しく躍動するのでありますが、そこには調和と秩序を求め再生したいという無意識な願いがあります。カーニヴァルは懐しい失われた楽園の神話を生きることでもあります。

カーニヴァルの精神の働くこの民衆の祭りの持つ自由な世界は、中世の厳しい公的な文化によって、国家の庇護を受けた中世の教会の祭式と対立するものとされました。17世紀まで西欧の宗教は、原初的、魔術的宗教儀礼の記憶を残し秩序破壊的性格を有するこの祭りとの峻別し、前者によってかわる道を歩んできました。

それ故、カーニヴァルは、変化し新しくなるものを憎みそれを怖れる態度から生まれた公的かつ一面的で真面目なもの、絶対的な価値を守ろうと努める真面目なものにたいして反撥するのであります。カーニヴァルは、諸々の真理が相対的なものであり、権力側の権威も相対的なものであることをあばき出します。そこに現出される自由・平等のユートピア的世界は社会的階級を無意味なものとし、社会的障壁を打ち毀す世界観の現われであります。カーニヴァルの祭りにあっては、それが真にカーニヴァル的なものであれば、召使と主人、支配者と被支配者といった違いは存在しないのであります。

民衆によるこの祭りの原理は文化の合理化——現代人の世界観に根源的な変化をもたらす原因となりました文化の合理化の故にかなり弱体化しました。中世(ほぼ5世紀から15世紀まで)の宗教的理想、ルネッサンス時代(16世紀)の英雄を理想とする時代は絶対的価値に基づく行動様式を肯定しておりますが、その絶対的価値は合理化から生じた能率と利潤性というプラグマティックな基準によって蝕まれました。資本主義の成長にもない、合目的的ではなくて絶対的である価値に基づく行動は価値なきものと考えられるようになりました。経済活動の合理化は新しい労働倫理を生んだのであります。その倫理は没個人性に立脚するもので、この没個人性は心のつながりを不可能ならしめ、現代人の持つ最大の問題の一つ、すなわち孤独をもたらしたのであります。しかもそれは都市にあっては人口が増大すればそれに応じて強くなるのであります。

合理化の波は、ヨーロッパでは、17世紀以降、民衆の祭りの持つ活力を殺ぎ始め笑いの自発性を奪い始めております。ところが、ブラジルにあっては、まさにその逆の現象が生じているのであります。カーニヴァルが第一歩を踏み

出し、ゆるぎないものとなると、それは広く普及しブラジル人の意識の形成、その世界観に影響を及ぼすに至ったのであります。ブラジル人は陽気で冗談好きな人たち、頻繁に催される祭りやパーティにおいて歌ったり踊ったりするのが好きな人びとであります。

ブラジルが発見されたのは1500年ですが、その時から進められた植民活動を条件づけた諸事情の故に人種的混淆がもたらされ、植民する側のポルトガル人、ブラジルの地の主たる未開のインディオ^{あるじ}、労働奴隷として——その労働はその大部分が広大な砂糖キビ農場でありました——アフリカから連れて来られた黒人、この三者が混血しているのであります。

ブラジルの植民のために送り出されて来た多勢のポルトガル人のなかにはインディオと黒人をキリスト教化する使命を帯びたイエズス会の神父がいました。その神父たちは、最初から、カトリックの教義を学ぶことを魅力あるものとするため実にさまざまな方法を用いなければなりません。イエズス会の神父らはインディオや黒人の持つ彼ら本来の信仰を完全に捨てさせることはできなかったのであります。彼らの宗教儀礼は音楽と歌と踊りを伴うものであります。それらは逆にブラジルのカトリックのなかに入りこんだのであります。ですからブラジルのカトリックは現在シンクレティズム的、祭りの特徴を有しているのであります。現在でも教会の数多くの行事には戸外の祭りが見られます。大農場の急速な成長がもたらした権力、富、豊かさのため、贅沢が可能になり、それを誇示するという態度が生まれたのは植民の始まった頃のことです。そして贅沢な生活、それを誇る態度から生まれたのが広範囲に及んだ好色的・煽情的な態度であります。ブラジルのように面積が広く、しかも政治の中心が遠く離れたポルトガルにあった国では、当然のことではありますが、広大な大農場を有する農場主は無限の権威を持ち、己れの意志、しかも常に宗教道徳と合致するとはかぎらない己れの意志を重視するのが常でした。このような理由から、カトリックの教えを説く神父は厳格で正統的な宗教教育を実行することが不可能になり、したがってカトリックの持つ厳しくかつ妥協を許さぬ側面が姿を消すに至ったのであります。

ブラジル人の宗教心はセンチメンタルで魔術的なものと見ることができますが、そのような宗教心がブラジル人の意識の形成に与り、ブラジル人のいくつ

かの典型的な性質を決定するのに意味ある働きをしました。ブラジルでは宗教とカーニヴァルが並存しており、この事実がブラジル文化のいくつかの特異性を生んでおります。おそらくこの重要な特質のためでありましょうが、ブラジル人は雪崩れのごとき合理化、現在の危機と不確定性の時代において本質的に人間的な価値を踏みにじり破壊するあの合理化にまきこまれなくてすんでおります。申すまでもありませんが、大都市や知的レベルの高い場にあっては物質主義的な考え方が重要な影響を与えていまいしょうが、一般大衆から上流のブルジョア階級に至るまでのさまざまな社会的階層の持つ宗教心を窒息させるに至ってはおりません。

カーニヴァルは人を秩序破壊へと誘い、なんの懸念もなく哄笑しながら世界を逆転させようという気持を起させるものであります。ブラジル人の性格はこの不遜で、しかも楽しもうとする精神に近いものであります。そしてまたあらゆる出来ごとを笑い話、小話にかえることができ、しかもそうすることで、あらゆる抑圧的な支配と非個性化を促進するすべての規律にたいして明白にノンと言う精神に近いものでもあります。ブラジル人は合理化された文化の押しつける、標準とされるモデルに反撥します。

改めて申しあげるまでもありませんが、ブラジルの文学はカーニヴァルの笑いの影響を受けております。しかし、ここでははっきりと申しあげておかなければなりません。ブラジルのように若い国の知的エリートらは、長い文化的伝統を持ついくつかの中心地——たとえばヨーロッパがその例であります——から来る影響を、否応なしに、受けざるを得ません。しかし、このような外国の影響を受けた文学と並んで、ブラジルの色彩を持ちブラジルの特徴をそなえたもう一つの文学が成長し息づいているのであります。

教養に支えられた文学化、すなわち真面目な文学は、例外なく、その文学のしきたりに従うものであります。しかし、そのような文学も、従順ならざる態度や揶揄にたいして敵しい態度をとりながらも、たとえば諷刺といった、カーニヴァル化しようとする形式の影響から逃れることはできないのであります。諷刺は文学のジャンルとしてはまことに古いもので、笑いと言語の一種形式であり、社会を支配している秩序にたいして抗議しその秩序を嘲笑するものであります。

Gregório de Matos は 17 世紀に生まれ、17 世紀に死んだブラジル最初の偉大な詩人であり、その作品は膨大なものであります。その作品に紛れもなく認められるのは二つの傾向、すなわちヨーロッパ文学の流れを汲む真面目で教養に支えられた作品群とブラジルのそして民衆的味わいを持つ、カーニヴァル化された作品群であります。

Gregório de Matos の恋愛詩の一部は、とくに 16 世紀、17 世紀の西欧の抒情詩を支配している「ペトラルカ的手法」によるものであります。「ペトラルカ的手法」とはイタリアの詩人ペトラルカの詩に見られるテーマを利用する技法のことであります。ペトラルカおよび彼にならったあらゆる詩人は、例外なく、報われることのない恋、つまり肉体的にはまれに見る美しさをそなえ、道徳的、精神的には比類なき完璧さを有する女性に捧げた報われぬ恋をテーマとして詠っております。つぎに引用します Gregório de Matos のソネットは愛する Maria に捧げたものであります。最初の二つのスタンザでは、そういったまれに見る美しさを詠い、それと同時に「匂うがごとき美しさ」を楽しむことを許さぬ彼女の徳の高さとけがれなさを暗示しております。第三のスタンザになりますと、時の移ろい易さのテーマが始まります。時の移ろい易さは当時の詩人たちにとっては大きな苦悩の原因であり、また瞬時に過ぎて行く青春とたちまち訪れる老年とは彼らの念頭を離れなかったものであります。

つつましく、また美しき Maria よ
 あなたの燃える瞳に燃える太陽が
 茜色かんばせの顔にすずしき曙が
 はっきりと見えているとき

心優しき地が、輝くやま鉱山が
 あなたの髪を光り輝く黄金に
 あなたの口をまばゆき宝石に
 つくりかえているとき

楽しむのだ、匂うがごとき美しさを

冷い老年が訪れて
青い葉を落さぬうちに

青春の盛りが過ぎれば
たとえ夜の墓場がなくとも
美しさは一日一日と去って行くのだ

最初のスタンザに見られるものは瞳と太陽、顔と茜色の曙の比喩であり、第二のスタンザでは、大袈裟なかたちであります。髪を光り輝く黄金にたとえ、口を宝石になぞらえております。第三のスタンザでは、恋する男性が愛する女性にむかって、彼女のそのような美しさが年齢と共に衰えてしまわぬうちにその美しさを楽しめと誘いかけ、最後のスタンザに至って Gregório de Matos は、死が訪れなくとも青春の盛りが過ぎて行くときには毎日毎日がその美しさの終りと衰えを意味することを忘れるなど説いているのであります。

ペトラルカ的抒情詩の影響を受けた Gregório de Matos の詩はヨーロッパ人の血をひく美しい女性、すなわち肌は雪のごとく白く、髪は金髪的女性——これはさきに述べたような詩人たちが繰り返し繰り返し詠った女性像によったものであります——を例外なく讃えた抒情詩であります。カーニヴァル化の傾向を持つ詩はそのような抒情詩の伝統的手法を完全にくつがえしております。Gregório de Matos が生きたのはブラジルの植民が始まって第二世紀目、つまりすでに黒人女性や、ポルトガル人と黒人による混血女性すなわち mulata がかなりの数にのぼっていた時代であります。彼は愛する金髪女性の透きとおるような姿ではなくて、白い肌を持たない女性の溢れんばかりの性的魅力を詠いあげているのであります。Catona なる名を持つ mulata の描写には、ペトラルカ的抒情詩に見られる表現も認められはしますが、その表現は逆転したかたちのものであります。つまり公的文化の持つ強制的なモデルを拒否し、無際限のエロティシズムの持つアナーキーな自由を擁護したものであります。

あの天空に、美しきカトーナよ
星が、輝く光があると

見た人は、愛の真実を
 いまだ悟らざる人
 スミレもまた花にかわりなし
 しかもその色は黒
 もし詩人が黒き花に
 価値を見出し得るのであれば
 このわたしも天上に
 色黒き星を讃えることができるのだ

ここにあるのは理想化した愛、しかもついに報われることのない愛をめぐる省察ではなく、民衆のなかの女性が存在する。具体的に実現可能な状況から生まれる自発的な喜びであります。愛する女性に天上の星にも似た属性を認める姿勢——これはペトルルカの抒情詩に典型的なかたちで見られるものであります——は残ってはいます。しかし、その星の色は異なり、うす黒い色になります、「ペトルルカの流れを汲む」詩にぎわめて普通に見られる曙の光り輝くバラあるいは純白の百合のかわりに黒い堇が現われた瞬間に。カーニヴァル化の傾向を持った作品における Gregório de Matos は伝統的なテーマからの解放と道徳的自由を目指しているのであります。

Gregório de Matos の諷刺的作品にわれわれが感じるものは、彼が当時の権力者たちにむかって放った、権威・秩序を恐れぬ批判から生じる笑いであり哄笑であります。たとえば当時の governador の一人の描写がそれであります。いまここに引用する短い一節はその governador の有名な鼻を扱った部分であります。

大きく突き出た
 みごとな鼻は
 驚くなかれ、御到着
 当の御本人より
 二時間前に

文学のカーニヴァル化には、民衆の笑いと揶揄を始めとするカーニヴァルの諸々の特質が認められますが、それは、ヒエラルキーの重みもなければ精神的な圧迫のもたらず息苦しさもない自由、崇高なるものや恥にたいするいかなる配慮も必要としない自由への願望として現われるのであります。確立した社会体制に背くあらゆる要素に価値を認めるということは、酔払いやバガボンダから娼婦に至るまでの、社会的にマージナルな存在をも価値あるものとするのであり、伝統的な英雄の持つ諸々の美徳とは重要な対立をなすのであります。それを始めたのが Gregório de Matos であります。そしてそのような彼に続く人びとが現われました。今日、最もよく知られている作家の一人 Jorge Amado はカーニヴァルの無条件な歓びにたいするブラジル人のあの好みを最大限に表現している人であります。

カーニヴァルを人間存在の一型式と理解しさえすれば、現実を把握するにあたって、笑いと心のびやかな姿勢によってそれを実現するというカーニヴァルの持つ広い視点もわれわれのものとするのであります。そのような笑い、そのような姿勢は、ブラジルにあっては、豪勢なマンションや貧民街にも、マクンバの儀式の行われる場所や教会の広場にも、サンバやフットボールにも存在し得るのであります。カーニヴァルの国ブラジルにあっては、この無軌道な歓びもまた、現代の出口なき苦悩、紛れもない苦悩を生きる一つの生き方であります。